



りん和小吉は、前田慶次郎という武将に仕えている。慶次郎は前田利家の甥だが、前田家を出奔し、京都伏見の本阿弥光悦の別邸を借りて住んでいた。

天正十九年（西暦1591年）の夏である。

もともと、りんは前田慶次郎を殺しに来た刺客の一人だった。

どうして、そのりんが慶次郎に仕えるようになったのか？

この章ではそれまでの物語を語ろう。

りんは赤ん坊の頃に、鈴鹿山地に隠れ住む一族に拾われてきた。一族にとっては一種の奴隷である『下忍』として育てられた、幼い頃から容姿に優れ可愛く、心も素直であった。

だが、その肉体が早少年期の中性的な特徴を持ち始めた時、残忍な上司に目をつけられ、『女』として犯され続けた。

『下忍』の身で抗うことは出来なかった。

虐待に絶望し自ら死のうとしたとき、留蔵という若者に救われた。留蔵は鈴鹿の一族の中で、刺客として特別な修行を受けている一団の一人だった。そしてりんもその身体能力を見込まれ、刺客として育てられることになった。

過酷な修行に耐える日々のなかで、自分を救ってくれた年上の若者、留蔵を慕う心がりんには芽生えた。

りんは、阿修羅のような慈悲無き殺人者という一面を持つと同時に、孤独な心を包んでくれる庇護者を求める女性的な感情を持つようになっていた。

修行が終わり刺客として諸国に散った彼らだが、ある時、留蔵は京都に滞在する前田慶次郎を殺すことを命じられた。

留蔵は返り討ちにあった。

それを鈴鹿の隠れ家で聞いたりんは逆上した。復讐の心が涙を抑えた。

泣くのは慶次郎を殺した後だ。りんは掟を破り、隠れ家を抜け出した。

京都に入り、ある夜、りんは慶次郎とその家来、小吉を待ち伏せした。だが、りんは慶次郎と一手見（まみ）えて、一人の力で慶次郎を討つことは適わないことを知った。

慶次郎は幼い頃から戦陣を駆け巡った歴戦錬磨の武士。その臂力と闘争能力は、天才的な殺人者であるりんの能力を上回っていたのだ。りんは慶次郎の従者、慶次郎ほどではないが、槍を取らせたらひとかどの働きをする小吉に目をつけた。

はじめて慶次郎を襲った夜、小吉は自分に見入っていた。

俺に惚れたらしい。この時代に普通の風俗であった衆道（男色）者だろう。

りんは小吉を籠絡することにした。

敢えて無防備で小吉に会い誘惑した。そして自分の味方につけることに成功した。

慶次郎を討った後は、小吉のものになると約束したのだ。

りんは慶次郎が討てたら後はどうでもよいと考えていた。

無断で鈴鹿を抜け出し、同僚の復讐を勝手にするという事は、属する暗殺団の掟を破ることだった。

事が成功しても、暗殺団の主家は統制を乱した自分を許すまい。

どうせ殺されるのなら、小吉とそれまで暮らしても良い。小吉も一時の欲望を自分に抱いているだけだろう。しょんべん臭い男（を）の子など、数回抱けば飽きるに決まっている。主人を裏切った小吉も墮ちるところに墮ちるだろうが、自分には関わりのないことだ。

だが、りんは小吉という男の心の深みを、その時は知る事はなかった。

りんは小吉と示し合わせ、ある夜、慶次郎を討つことにした。それも真正面からだ。後ろから卑怯な手で暗殺したところで、りんの怒りは収まらない。愛する留蔵にあの世であつたら誇れるような殺し方をしたかった。

りんは既に刺客ではなかった。

戦場で生死をともにしてきた小吉は、慶次郎の力を十二分に知っている。だから、卑怯な襲撃を提案するだろうと思ったが、意外にも小吉も正々堂々と慶次郎と対峙したいと言った。しかも得意の槍は使わず剣だけで。槍を主に向けるのは出来ないと言う。

りんはこの男の本心を理解出来なかった。

自分への情欲のために主人を裏切るような男が、なぜ正面から向かうというのだ。

りんは、この男が自分を罾に掛けようとしているのかもしれないと考えた。小吉は慶次郎と対峙した途端、自分を裏切るかも知れない。それを確かめるために一計を案じた。小吉に先鋒をさせるのだ。

「小吉さん、最初の一太刀を慶次に見舞ってくれないか？俺は慶次がそれを防ぐときの間をつく」

「・・・りん、前田様は隙を作るじゃろうか？」

「ほんの少しの構えの乱れ、足の踏み変え、腰の揺れ・・・それで十分じゃ。俺には斬るべきところが見える」

「ほ、本当か！」

「そうじゃ。構えに気を取られれば、転げて足を切る。足踏に気を取られれば胸を突き抜ける。ほんの一瞬で勝負はつく」

小吉はりんの言葉に背筋が凍った。一体、何人の腕達者の者達の命を、この幼さを残す男の子は奪ってきたのだ！

談合している時でもその眼は、空恐ろしいほど美しく澄み渡っていた。

だが奥底が見えぬ。

小吉が夜半に慶次郎の部屋に入った。

慶次郎は夏で蒸し暑いのに茶を立てて飲んでいる。

慶次郎の目には小吉が既に敵として映っていた。いつもと違う小吉の態度は、この男にとっては『戦い』を意味していたのだ。

「どうした・・・今宵のお前はどこか甘酸っぱい匂いがするぞ」

小吉の心はとうに見透かされていた。

小吉が刀を抜きながら喚いた。

「このお仕置きはあの世で受けまさあ！」

部屋の戸口の陰で聞いていたりんは、この言葉も理解できなかった。色に惑わされた男が、まだ主に敬意を払っているのか！何かの符丁か？

りんは抜き身で慶次郎の部屋に入り、小吉に目で合図した。小吉が本当に主を裏切るか次の瞬間で分かる。もしそうでないなら許さぬ！一撃で小吉を斬って今夜は退散する。

だが、小吉はまたもや意外な行動を取った。

刀を投げ捨て、鞘に収まった大刀を左手に持って佇立する慶次郎に、赤子のように抱きついたので！少なくとも慶次郎の両腕の動きは止められた！

「りん！今じゃ！儂ごと斬れ！」

りんはびっくりした！小吉は裏切った主とともに俺に斬られて死ぬつもりか！しかし千載一遇の好機！一瞬の隙も見逃さないりんの体は動いた。

だが、りと慶次郎の間は三間（約六メートル）。りんが足を踏み出した時、慶次郎は右手を振り絞り、小吉の顔を殴った。小吉の腕が緩む！りとの間は二間！慶次郎は小吉を突き飛ばし右手を柄に付け、大刀を抜きはじめた！

小吉は背中と頭を壁に打って昏倒したようだ。

りんは間合い一間に近づいたとき、それまで右手に垂らしていた剣を上段にして左手を添えた。しかし慶次郎の大刀は右上に既に引き抜かれ、弧を描いてりんの上を下ろされようとしていた。

慶次郎の異常な腕力によってその剣は、一瞬早く自分に届くということを悟ったりんは、鋭く振り下ろそうとしていた上段の剣を顔の前に留めた。次の瞬間、慶次郎の剣が打ち下ろされ、刃と刃がぎゅんと悲鳴を上げる。

慶次郎の大刀は身が厚く重い。りんの刀は人を斬る柳刃包丁の如く薄く軽い。慶次郎の刀の勢いでりんの刀の棟がりんの頭に押しつけられ、りんは飛び下がった。

小吉は確かに慶次郎を裏切ったようだが、何かおかしい。自分を裏切った小吉をなぜ慶次郎は近づかせ、抱きつかせたのか？その前に小吉を一刀両断に出来たはずだ。だが、慶次郎の小吉を見る目は穏やかであった。

ふん、そうか。

四十を超えた慶次郎と、三十そこそこの小吉との間にやはり何かあるのだろう。小吉は明らかに衆道だ！慶次も小吉を切り捨てられない未練があるのじゃろう。二人だけでこの広い屋敷に住んでいるのも、人に見咎められぬために違いない。

りんは慶次郎に放りだされ伸びている小吉を起し、刃を小吉の喉に当てた。小吉は朦朧としていたが、呻くように言った。

「・・・りん、な、何をしている・・・敵わぬ！逃げろ・・・」

りんは慶次郎に怒鳴った。

「慶次！刀を捨てろ！小吉を殺すぞ！」

りんは、この主従が衆道の関係にあることに賭けていた。衆道とは、男と女の道よりも契りが固いと聞いたことがある。

慶次郎ががらんと刀を捨てた。

勝った！

「そこに座れ！」

慶次郎が胡座をかいてどすんと腰を落とした。ごつごつした四十男と三十男が、愛を語る場面など想像も及ばぬが、こやつらはそんなもので命を落とすのよ！

油断無く立ち上がるりに、脳震盪を起こし起きあがれぬ小吉の手がすがった。

「りん！・・・ご、後生じゃ！やめてくれ！」

りんは小吉を見ることもなく小吉の腕を切った。傷は浅かったが、小吉は腕をもう上げることは出来なかった。

小吉に意識が戻った時には勝負はついていた。

りんは自分が負けたことを信じる事が出来なかった……。確かに慶次郎の太刀を奪い、戦う体勢が出来ぬように座らせた。そして渾身の力で禅座する慶次郎に袈裟切りを見舞った。それを防ごうとする慶次郎の腕を切り、脚を切り、土壇まで剣を振り下ろすはずだった。

しかし、りんの剣は、慶次郎の大きな手でその顔の前で止められていた。決死の白刃取りであった。

慶次郎はりんの刀が振り下ろされるとき、無心になった。無心になっても、それまで経験してきた修羅場が、瞬間に走馬燈のように思い出された。そして時間はその歩みを恐ろしいほどゆっくりと変化させた……。自分に殺されていった者達の瞬間瞬間の顔が見えたが、その反面、注意力は落ちてくる刃の全気配を感じていた。無意識に繰り出す両手。

し損じたらという恐怖はすでになく、刹那に身体が動いた！

偶然か強運か、りんの刀は見事に慶次郎の手の平に収まり、その強大な腕力で捻り折られた。りんは体の平衡を失ったが、慶次郎が折った刃を持ち直したことを悟り、とっさに後ろに撥ね飛んだ。

慶次郎の持った折れ刃が右胸を擦（かす）る。

尻餅を突き、右手に残った折れた剣を投げようとする、するりとそれが畳に落ちた！

「！・・・？」

右手に力が入らない！

右肩を見ると、裂かれた小袖の下の白い肌の上に、鎖骨から胸にかけて血の筋が走って行く！慌てて左手で右腕を抱く。それとその筋から血飛沫が吹き上がるのが同時だった。

激痛が来る前に、それを不自然な姿勢で受けるのを出来るだけ避けるために、膝を揃えて身構えた。そして身が裂けるような痛みが！

・・・どのくらい気を失っていたのだろう。

夢うつつに死んだ人々が去来した。愛した留蔵が笑い、哀しげな顔で去っていく。

留あにい！

行かないで！

俺を一人にしないで！

俺は地獄に堕ちる。でもあにいとなら耐えられる！

・・・地獄はそれも許してくれないのか・・・

目の焦点があうと誰のでもない笑い顔があった。でも懐かしい・・・小吉の笑い顔はとぼけて頼りないような・・・普段おっかない顔をしてるのに・・・留あにいもそんなだった・・・

激痛が戻った。死んでいた方が楽だ！これが小吉の俺への罰か！

「あうっ！」

「動くな！りん！動くと傷が開いて死ぬぞ！」

「・・・小吉さん・・・俺は小吉さんを裏切った・・・殺して下さい・・・こんなお仕置きなんて・・・酷い」

「りん！生きるんじゃ！それが留蔵の望みじゃ・・・」

何を言っているのか？・・・留あにいが俺が生きることを望んだ・・・？

「儂はどうなる！お前のために前田様を裏切って、儂はどうする！儂と暮らしてくれるんじゃないのか！」

そうか・・・そう・・・約束だよ。でも小吉さんも慶次に許して貰えるのかい・・・？

「あれは嘘か！」

いや・・・嘘じゃなかった・・・俺が掟に殺されるまで一緒にいてやろうと思ってたんだ・・・うまく慶次を仕留められれば。りんの目から涙が流れた。

もう全てはご破算だろ・・・

「小吉・・・ご免・・・」

りんはまた気を失った。

小吉の必死の看病でりんは一命を取り留めた。りんを小吉は優しく介抱した。

もう片手が動かぬ身体では復讐は意味がない。刺客のりんは死んだのだ。小吉自身も慶次郎の仕置きの沙汰を待っていた。許されるわけがない。

しかし慶次郎はそんなことを忘れたように上杉家の家老、直江兼続や安田能元（よしもと）の京都屋敷に出入りし、茶会、歌会にうつつを抜かしていた。そう思うと馬場に行って松風に乗って槍を振り回し、狩り場に行って矢で兎や雉を撃つ。納屋では干し肉がふんだんに作られ、行商に売るほどだ。

そうして何日も日が過ぎていた。いつもと変わりなく、小吉は慶次郎の世話をする。そしてりんの看病のために飛んで自分の部屋に行く。

慶次郎と小吉は衆道であったのではない。お互いに孤独の心を許しあい、共に生死を分け合う『絆』で結ばれていた。慶次郎は小吉のことを終生の友と考えていた。だから例え、小吉に刃を向けられようと、怒ることはない。そこで死ぬのならそれでよい。

そして小吉のりんへの想いを理解していた。小吉が最後に言ったあの世でも臣従を誓った言葉。だが、このままでは二人とも殺される。それよりは二人とも生きるに如（し）くはない。だから慶次郎は小吉を殴り飛ばした。

時が流れ、りんは右手は動かぬものの、体を起こすことが出来るようになった。だが、自分に手を触れようとしない小吉が不思議だった。

俺に惚れたんじゃないのか。

「小吉さん・・・小吉さんと前田様は契りあっているのか・・・？」

「な・・・なんじゃ？やぶからぼうに」

正座したりんは小吉の目をじっと見ている。

「はは・・・儂と前田様がか？・・・そうじゃな・・・儂は前田様の押しかけ女房のようなものじゃ」

りんは小首を傾げた。そんなら俺はなんじゃ？浮気をしたのか？

「儂は親兄弟がなくてな。幼い頃、寺に奉公に出された。かわいげの無かった儂は奴隷のようにこき使われた・・・」

ふうん、それがどうしたんじゃ。俺だって同じだ。俺のような目に遭わなかったのなら幸せじゃ。

「儂は僧兵になるべく鍛錬を受けた。力を付けた後、気に入らなかつた上役を半殺しにして寺から逃げた。・・・それからこの世の嫌われ者じゃった。」

小吉は自分の顎を撫でて続けた。

「何の望みもなく諸国を流れ歩き、喧嘩や女郎買いに明け暮れ、土地を追われた。・・・気が付いてみると金沢の前田様のお屋敷の前に行き倒れになっていた」

「前田様は儂を助けてくれたんじやが・・・儂は前田様を殺して金品を盗もうとしたんじや」

りんは驚いた。

「・・・え・・・前田様を？」

小吉はにやりと笑って、

「じやが、敵わなんだ。それどころか、反対に何でももって行けと言われたわ。赦して貰ったんじや」

「・・・盗んで逃げたの？」

「ああ・・・じやが気になっての。その後、行われた前田利家様と佐々正成とのいくさを見に行ったんじや。戦場の高い木に登っての」

「前田様は合戦には一回出られただけで城に戻されたが、儂は肝を潰した・・・たった一騎でいくさ場を突っ切り敵陣に突っ込んでいかれた・・・死に場所を求めるようにな。儂には分かった。この人も孤独なんじやと・・・後から聞くと『退屈』だとおっしゃられたがの」

りんは小吉の目をじっと見続けていた。

「儂は決めた。どうせ儂はろくな死に方はせん。だったらあのお方の後に従って、二人で存分に暴れて死のうとな」

りんは心にわだかまっていた質問をした。

「・・・でもなぜ前田様はお前様をあのと看斬らなかつたんじや？・・・前田様はお前様を好きなんじやろ！」

りんが女のような感情でなじったのを感じて、今度は小吉が驚いた顔をした。

「・・・え・・・前田様が？儂を・・・？」

しばらくお互いを見つめていたが、小吉はがははと笑った。

「多分、儂がおらんと困るからじやろ。儂は飯の支度や帳簿、前田様のお召し物までお世話をしているからな」

「儂は前田様の御心でいつでも死ぬ。じゃからその前に小者を雇って、それらを申し渡ししなくてはならん。明日でも口入れ屋に行こうと思う」

りんは慔然として言った。

「・・・お前様が死んだら俺はどうなる・・・俺もお仕置きを受けねばならんじやろ」

「お前は生きろ。儂や留蔵の代わりに生きるんじや。前田様に儂の命と引き替えにお許しを願う。お前は刺客はもう辞めるのじや」

「そんな虫の良い話があるか！前田様が俺を許す分けもない！」

そしてりんは小悪魔のように笑った。

「・・・じゃから最後に二人で良いことをしよう。それがお前の望みだったじゃろ？俺たちが死ぬまで短い間じゃが。お前様は俺のために前田様を裏切ってくれた。だからせめてもの償いをしてやる。俺を存分に抱いて極楽に行け」

「そ・・・そんなことが出来るか！お前はまだ傷が癒えておらぬし」

「俺に惚れたのじゃないのか！俺を女のように抱きたいんじゃろ！」

りんは左手を付いて小吉の懐ににじり寄った。自分が女のように見られ、衆道以外の男達にも欲望を与えることを知っている。

だが、不幸中の幸なのか『男』は一人しか知らない。嘗ての上司の鬼吉だけだった。留蔵に救われる前に鬼吉に所有され、体を縛られながら散々に犯され続けた。

心を明け渡すまいと必死に耐えた。だが、縄が体に食い込み、乳首を執拗にいじられ吸われ、蕾を裂かれて血糊でぬめる体内を長時間突かれ続けると、被虐的な快感を味合うようになった。

親兄弟の愛や温もりを知らぬ肉体が、鬼吉との肌の重なりを感じ、体内に差し込まれた肉桂の摩擦を覚えるたびに肉体が、心の憎しみとはよそに、人のものとなる快楽に震えはじめた・・・少なくとも、その時間だけは孤独ではなかった。

小吉は鬼吉とは比べものにならない。

獣のように自分を扱うことはない。自分の欲望をただ果たそうともしない。優しい。

小吉が自分に抱いている想いが慶次郎と戦う前まででも真実なら、もうそれで良かった。りんの心の女性的な部分が発動し、鬼吉の体の熱さが小吉だったらどれほど幸福だっただろうという想いが、りんの体内を熱しだした。

俺は小吉のために『女』になるのだ！

という感覚が頭を巡りだし、麻の寝間着に飛び出てきた乳首が擦れて肉体の奥底を刺激する。鬼吉に執拗に吸われ、翌朝まで腫れて痛んだことが体の記憶に戻ってきた。

鼓動が激しくなり、唾が口の中に溢れ、思わず舌で唇を濡らす。小吉は、りんのあまりにも妖艶な仕草と顔に、ふぐりがびくんと引き上がるのを感じた。

女のような、艶めかしい『異性』の生きものがその前にいた。

りんは息を浅く突きながらも、自分の肉体の初めての変化を感じ取り、自分は男でありながらこんなにも対極の性をも所有していたのかと驚いた。

この男に抱かれないという欲望が、ごぼごぼという音を立てて湧き上がるようだ！

「小吉！俺を抱け！なんでもしてやる！どんな恥ずかしいことでも！女のように化粧してもいい！」

だが、小吉はついにりんを抱かなかった。小吉は、こんなにもか弱い小鳥を傷つけることは出来なかったのだ。そして俺はこの小鳥に惚れた。変わるまい。

「りん、・・・誓う。終生お前だけじゃ」

りんはこれほど火照る肉体を鎮めてくれぬ小吉に腹を立てていた。ならばどこまでもつきまとうてやる！

「・・・ほんとだね？・・・目移りしたら・・・殺すよ」

「ああ・・・殺せ」

「ほんとだね・・・」

(そして俺も死ぬ)

小吉はしばらくすると、横向きにりんを抱いたまま寝息を立て始めた。りんの股の間に脚を入れたまま。りんは意を決して小吉の太い片足に下腹を擦り付け、ゆっくり腰をしゃくりはじめた。りんの目は潤み、無防備に寝ている小吉の顔を見ていた。

(小吉の馬鹿。人の気も知らないで・・・)

りんの右足は下になっているので大きな動きは出来ないが、両足を締め、小吉の腿に自分のものを押しつける。小吉に抱かれ強く陰部を締め付けられることを考える。

(あ・・・あっ！)

りんの肉体は硬直し肩の傷が痛んだ。小吉の懐にしがみつくと脚の締め付けを緩めるたびにほとばしり出た。後ろから責められ、小吉の手の中で行く自分を想像して。

最後の放出が終わると浅く息を突いて、心臓の静まりを待った。そしてりんは可愛い舌で小吉の唇を舐めた。小吉はくすぐったいという顔をして上を向いてしまった。躰を立てている。放心したようにりんはぐったりと小吉の方を向いて横たわっていた。

りんは自分の下帯の中にそっと手を差し込んで、まだ熱い粘液を掬った。

(俺には要らないものじゃ・・・)

りんはその指に絡んだ一筋を口に含んだ。

(小吉さん、俺に生涯を誓ってくれたけど、殺してきた人の血で穢れた俺は、歴とした武士のおまいには相応しくない・・・だからせめておまいのもの・・・いつか俺の中に注ぎ込んで貰いたい・・・やがて仲間が掟を抜けた俺を追ってくる・・・こんな俺だから心の契りしか出来ないけど)

こうしてりんは小吉と生活をするようになった。ところで慶次は、二人が自分を殺そうとしたことなぞ意に介していない様だ。

右手を庇いながらりんは小吉を手伝って飯の支度をした。やろうと思えば毒を入れることだって出来る。

ある日、小吉は用事で出かけた。夜遅くなるという。彼が居ない晩、りんは一人で夕餉を作った。

厨房の板床に座を作り、置かれた膳の前に慶次郎はどかと座った。土間の近くに置かれた膳には慶次郎一人分の食器しかなかった。

「・・・りん。儂一人で喰わすつもりか？」

りんは驚いて慶次郎の目を見た。

「儂一人では寂しい。お前の膳も作れ。一緒に食べよう」

りんは恐る恐る玄米飯を盛った椀を差し出した。慶次郎はそれを取るとにと笑い貪り食べ出した。りんを疑うどころではない。

堅魚（鯉節の前身）で出しを取った味噌汁を飲んで、

「うまい！お前が手伝い出してから味が代わったと思っておった！小吉はどうやら舌貧乏の様じゃ」

慶次郎は屈託無くわははと笑った。

ある日、慶次郎は墓参りに行くと言った。

りんは小吉の馬の後ろに乗って雨上がりの野山に登った。

りんは知らなかったが、そこはかつて留蔵が夜桜を観ていた慶次郎達に挑んだ場所であった。

留蔵は刺客らしくなく真正面から慶次郎に向かった。慶次郎の噂を聞いた。織田信長、豊臣秀吉の片腕、前田利家さえも御しきれなかった婆娑羅武士、自らの義に従う男。信長が利家を可愛がっていなければ、前田家の当主であった悲運の男。しかしこの男の命知らずさは計り知れない。

留蔵は思った。このままでは俺たちは刺客としていつか人知れず死ぬ。闇の中で足掻き独りで朽ちるのだ。だが、りんは生きて欲しい。俺はりんが愛おしい。生まれ落ちてただ一つ守りたいものがあつた。それがりん。

慶次郎の胸を下から切り裂いたと思った時、留蔵の刀は着込んだ鎖帷子を斬っただけだった。そして慶次郎の大刀が留蔵の右鎖骨から腹まで振り下ろされていた。

留蔵は、左手で切り落とされ残った右太腕を押さえて歯を食い縛っていた。

激痛で身体が硬直していなければ笑ったであろう。嬉しかった。この男は本物じゃ！

まだだ・・・まだ死んではならぬ！肺から血が湧き上がって来るが、構わず必死で声を振り絞った！

「・・・お願いしたき義があります！」

小吉が叫んだ。

「刺客如きが！誰に送られた！」

慶次郎は小吉を制した。この男、刺客のくせに正面から挑んできた・・・しかも相当の手練れだった。一廉（ひとかど）の男なのだ。必死に何かを託そうとしている。

「聞こう」

留蔵は伏して事切れていた。その顔は笑っているようだった。安堵したように。慶次郎は留蔵の最後の言葉を反芻していた。

「・・・貴方にしか・・・貴方だからこそのお願いで御座る・・・！」

「りん・・・ここを掘ってみろ」

小吉に言われてりんは左手で木ぎれを持ち、動かぬ右手でそれを抱くようにして墓らしき標（しるべ）から少し離れた土を掘った。小吉は心配そうに見ている。

油紙に包まれた物を見た時、りんの頭は怒りで白くなった。留蔵の刀！あの墓は朽ちた留あにいのもの！

りんは左手ですらと刀を抜いた！左手でも十分に戦うことができるのだ！小吉は慶次郎が何故りんをここに連れてきたか判らなかった！・・・だが、今はりんを斬らねばならない！儂もその後死のう！

慶次郎は留蔵の墓の前に座り静かに拝んでいた。徳利を持ち、標の上からかけた。

「世が世なら友として酒を酌み交わしたであろう・・・のう留蔵」

りんは混乱した。何故、留あにいに慶次はそんなことを語るのだ！
「留蔵はお前を生かして欲しいと儂に頼んだ。死を賭してな・・・お前のことを『妹』と呼んだ」

りんの手から刀が落ちた。留蔵の墓の盛り土に伏して土を掻き抱き身を振った。

「留あにいっ！」

そして赤子が声を嚔らして泣くように号泣した。

しばらくしてりんは震える声で言った。

「留あにいの・・・最後は如何でしたか・・・？」

「立派な最後じゃった。儂が出会った最強の男であった。お前のことを最後まで案じておった」

りんは慶次郎の方に向きを変えて地面に頭を擦り付けるように平伏した。

「お・・・俺を小吉さんの下で働かせて下さい・・・何でもします。・・・もし足手まといになるのなら自分で死にます」

「おい・・・死んで貰ったら困るな。儂が地獄で留蔵に顔向け出来なくなる」

小吉に向かって、

「りんはお前と共に儂の家臣とする。禄を分けてやってくれ」

それから京雀（京都の噂好きの人達）の間に慶次郎の主従の話題が出るようになった。

前田慶次はものもちよ

かはらげ（黒髪 of 駿馬、松風）

かまやり（小吉の宝蔵陰流鎌槍）

ながくろかみよ

孤独な三つの魂がこの世の一時の安らぎの場を見つけたのだ。

時は戦国末期。

儒教で飼い慣らされ、牙を抜かれた江戸時代の武士とは異なり、もののふは自らの義を信じて生きることが出来た。

最後の古武士として慶次郎は生きる。それに従う小吉とりん。

彼ら主従の前に束の間ではあろうが、死神も道を空けざるを得ない。

了
原著「前田慶次郎異聞」の情報は作者のホームページをご覧ください。

<http://www.ne.jp/asahi/songshang/hatsuse/>